
君に願いを

ねこのしっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に願いを

【Zマーク】

N1462E

【作者名】

ねこのじつぽ

【あらすじ】

七夕でもお祈りしたけど無理でした。神社にも、教会にも行つたけど、全部ダメでした。こういうのは継続的にお祈りを続けなくちやいけないんだって分かってるけど、私にはもうそんな余裕はないのです。神様も織姫さまも彦星さまもダメなら、もう、サンタさんしかいないでしょ。」「お願いしますっ！！！あたしにつ・・・彼氏いない暦16年（＝年齢）のこのあたしにつ・・・彼氏を下さいつ！！！サンタさん！！！」

12月23日

七夕でもお祈りしたけど無理でした。

神社にも、教会にも行つたけど、全部ダメでした。

こうこうのは継続的にお祈りを続けなくちゃいけないんだつて分かつてるけど、私にはもうそんな余裕はないのです。

神様も織姫さまも彦星さまもダメなら、もう、サンタさんしかいないでしょ。

「お願いしますっ！あたしこっ・・・彼氏いない暦16年（＝年齢）のこのあたしにつ・・・彼氏を下さ～っ！！！サンタさん！！！」

「・・・・・・ふつ・・・」

後ろから、笑い声がした。私は咄嗟に後ろを向く。

何で？ここはあたしだけの秘密の場所のはず。

都会のド真ん中の、誰も入らない廃ビルの屋上。人気がなく、一人になるには絶好の場所。だからあたしは叫んだ。サンタさんに、願いを。

顔から火が出そうだ。いや、比喩^{ひゆ}じゃなくて、マジで。振り返ると、そこにいたのは知らない男の子、赤いTシャツにGパン、黒い髪で長身の男の子だった。

「なななな、何よあんた！－！」こで何してんの！－！つていうかここ廃ビルで、立入禁止のハズよ！入っちゃダメでしょ！－！」

「……いや、それはアンタにも言えるんだけどな」

私が叫ぶと、男の子は静かに言った。私はまた叫んだ。

「……はあたしの秘密の場所なの……だから入ってきちゃダメ……
……ていうか、今あんた、あたしが叫んでたの……聞いて
た？」

男の子は静かに・・・笑つた。

「もちろん、聞いてたぜ。『彼氏いない歴16年』だろ?」

・・・聞かれた！聞かれた！！聞かれた
つ！！！

卷之三

実際信じてるけどサ）。

んで、彼氏いない歴16年という事がバレた。さらに、誰でもいいから彼氏が欲しいと言う軽い女だと思われたっ！！！

・・・いや、別にこの男の子に思われたからといって何も害はない
んだけどさ。

けどもし、この子が明日からうちらの学校に編入してくる転校生で、
友達作りのための話のネタを探しに来ている人だつたりしたら・・・
。

もし、この子が原宿イチのモテモテキングで、東京中の男の子たち
に精通してて、今度は東京中の女の子たちをチェックしてて回つて
る最中だつたりしたら・・・。

もし、この子があたしの男友達（全員彼女持ち）に紹介されてあた
しに会いにやつて来たうちの一人で、とりあえずまずはあたしがど
んな人なのかとかを見に来たチェック役の人とかだつたりしたら・・
。

ダメだ。考え出したら止まらない。どんどん思考が悪いほうにいつ
ちゃう。

一人悶えている（？）あたしの横で、男の子は静かに口を開いた。

「願い事は・・・『彼氏が欲しい』で、いいのか？・・・原は
田　芽衣子」

「・・・・・・は、願い事？つてか、なんであたしの名前・・・？」

「俺は二太。^{さんた}サンタクロース見習いの、三太だ。

・・・お前の願いを、叶えに来た」

「…………はあ？」

「…………何この人、いきなり。三太？サンタクロース見習い？願い？私の願いを……」

「…………叶えにきたああ！？」

「ああ」

「え、ちょっと待つて、頭整理させて。サンタ見習いの三太？サンタつて本当にいるの？願いを叶えに来た？どーゆーこと？」

混乱している私に男の子……三太は淡々（たんたん）と言った。

「順をおつて話そう。まず、サンタはいる。

俺は沢山たくさんいるサンタクロースのうちの一人の見習いだ。

サンタ志望の者は、まず、サンタクロースの養成学校へ行く。そして、その学校を卒業したら、現役サンタクロースの弟子となり、実践じっせんでの経験を積む。

そして、3年間の弟子生活を終えると、最後にサンタ就職試験があるんだ。

それは、担当の人間一人の願いを叶えるというものなんだ。その一人と言うのはそれぞれクジで選ばれるんだが……

「あたしが、あなたの担当する人間に選ばれたと？」

「ああ、そういうことだな」

・・・いや、信じられないって。

だっておかしいでしょ。

いきなり来て、「サンタです」とか言われても、普通信じられないって。

何この人、ってなるでしょ。

コレは・・・関わらない方が身のためかも。

「ナウですか、じゃあ私はコレで」

「お前、信じてね」だら

逃げるよつて屋上の出口へと向かう私に、男の子・・・三太はボソッと囁いた。

「いや・・・そりゃあ、信じないっしょ

私が立ち止まつて言つと、サンタはまた口を開いた。

「信じるよ。信じなきゃ願いは叶わねーぜ?

ていうかお前、さつきは大マジメにサンタに願い事叫んでたくせに、いざ現れたらサンタ見習いのことは信じねーってか?

それってムジユンしてねーか?

לְעִירָה • • • • • • •

痛い所を衝かれた。・・・けどここで負けてたまるか！

「確かに・・・ムジユンしてますねえ。
ナゾ、サシタさんは言じても、あん

そりやあ疑いたくなるでしょー！

からな
女もいるし

「ウソだ！！信じないね！そんなウソに騙されるほど、アタシは安い女じゃないのよ！」

「現実を見ろって……。サンタ見習いの俺が言つてんだから間違
いねーだろ」

「だからその“サンタ見習い”って言わこと 자체がウソくさいのー。」

「アーネストジソン、

「いやあ、証拠を見せてみなさいよ。」

その瞬間、三太の動きがピタリと止まった。
いや、三太は固まつたと言つた方が正しいだろう。

勝つたな・・・と思つた。

「ばつ・・・お前、そんなん見せれるワケねーだろ」

「へえ~、ないんだ?」

「ちづーよ。そーゆーのは人間には見せちゃいけねーことになつてんだよ」

「ないんだよね?」

「あるつひとつてんだろ」

「他人に見せられない証拠なんて、証拠とは認めないよ~!」

三太はチツと舌打ちして、Gパンのポケットに手を突っ込んだ。

そして、何かを取り出した。

「鄙則くらつたら、てめーのせいだからな

取り出したのは、サンタクロースの絵の描かれた、木の板だった。

三太はそのプレートの内側の方を、私の顔の前に突き出した。

「世界サンタ連盟 第192802号」

森園二太もりその さんた？」

そのプレートにはそう彫られていて、その下に「サンタ見習い」と印刷されたシールが貼つてあった。

「ああ、192802号の三太だ」

「いや・・・こんなもん突き出されましてもですね・・・」

「世界サンタ連盟は政府公認の組織だ。公にはされていなかっため、上層部の人間しか知らないけどな」

「こなんん出されても知らないわよー。なんかもつと分かりやすい感じのないの？魔法とか使えないワケ？」

「お前は一体サンタにどんなイメージを持つているんだよ・・・。サンタは魔法は使えねーよ。」

ただ、俺には国家魔法使いのダチがいるから、一つだけなら魔法は使える

「国家魔法使いつて何よ！？・・・いやいや、じゃあその魔法見せてよー！」

もはや私の中で、三太が本当にサンタクロースがどうかなんて、どうでもよくなっていた。

「これも罰則モノなんだが・・・信じてもうつためだ」

三太は少し考えてから静かに言った。

「芽衣子、お前は俺が魔法を使つたら、俺が本当のサンタ見習いだ
と言つことを信じるんだな！？」

「おつけ、信じるよ」

「な、ひ良二。じやあ田を騒れ」

私は目を瞑つた。

「3-2-1で皿を開けろ。じゃあ行くぞ。」
「2-1-0」

1

目を開けると、今までぼろぼろちいきコンクリートだった屋上の床が、花で埋め尽くされていた。
つまり一面、花畠。

「…信じたか？」

「・・・信じた。こんな、常人には無理」

「じゃあ、願い事、叶えさせてもらひうぜ?何、『彼氏が欲しい』?」

「・・・・・ちょっと待つて、説明する」

* * *

事の起こりは、私が16才になった、6月。

パパが私を呼び出して言ったの。

「芽衣子ももう16才。結婚出来る年だよなあ。

芽衣子はいざれこの原田財閥を継いで貰わなければならんだろう。
そのためには立派な旦那様が必要だよ。つてことで芽衣子、お見
合せんか?」

私のパパって、ホラ、銀行とかやつてる原田グループの社長だから、
私の家、すつごい金持ちなのね。

だからお見合い話とか、いざれは来るんじゃないかなーとは思つて
たの。

まあ私も好きな人いなかつたし、それでもいつかーつて思つてたの
よ。

けどね、パパから渡された見合い写真を見て、呆れた。

だって私の見合い相手、ありえないんだよ！？

ち まるこちゃんの花輪君はなわみたいな髪型かみがたしてんの！

しかもなんか王子服着て、バラ持つてるし・・・アレ絶対ナルシストだよ！！

あんなのと結婚すんのは絶対イヤ！！だから私、パパに抗議したの。お見合いなんて絶対嫌です、つて。

そしたらパパが言ったの。

「そんなに嫌と言うのには、何か理由があるのか」つて。

流石に、「相手の人がイヤ」とかつて、失禮でじょ？

だから、つい見栄張みえつて、言っちゃつたの。「私には好きな人がいるからお見合いなんて嫌だ」つて。

好きな人、いないのに。で、パパが言ったの。

「じゃあ、今年中にそいつと恋人になつてこい。そしたら婚約は破は棄きしてやる」つて。

でも本当は、私には好きな人はいないでしょ？つまり私にとつてパパのメッセージは「今年中に誰でもいいから彼氏つくつたら婚約破棄してやる」つて「トなのよ！」

だから私は何としても今年中に彼氏をつくらなきゃいけないの！！

* * *

「・・・・いや、おかしいだろ」

「何が！？」

「最後の・・・父さんの言葉の解釈が・・・」

「いいの！…とりあえずはその場しのぎで！…あとは自分で何とかするから！」

私は三太に掴みかかった。

「え・・・」

「願いを叶えてくれるんでしょう？お願い！一日だけ、私の彼氏になつて！」

「・・・」

三太は一瞬たじろいで、そのあと私を見つめて、一言「分かった」と言った。

「ほんと！？」

「俺は芽衣子の願いを叶えるために来たんだしな。1日で良いのか？」

「うん！…じゃあちょっと待って、パパに電話するから」

・・・

「電話してきたよーー明日来いだつてさーー。」

「・・・早いな」

私と三太は、まだライトアップされていない巨大ツリーを見る。

「もう年末だからね。もうクリスマス近いし・・・。あれ、明日つて、クリスマスイヴ?」

「そうだな」

「明日は・・・よろしくね

「・・・・・・ああ」

そして私たちはいつたん別れた。

明日、待ち合わせは毎3時、私の家の前ーー！

「・・・いい？あなたは今日は私の彼氏。それっぽく振舞つてよ。」

「私たちは家の前で、最終確認を済ませた。」

「じゃあ、行くよ」

ギイ・・・

私は大きな家の扉を開けた。玄関には、お手伝いさんが数名。

「芽衣子様、旦那様だんなさまがお待ちでござります」

「わかつてゐ。三太みつた行くよ」

「ああ

長い廊下ろうかを2人で歩く。

やがて、「父」というプレートのかかった部屋が見えてくる。パパの部屋だ。部屋の前に立ち、一度大きく息を吐いてから、ノックをする。

「入りなさい」

「パパ、芽衣子だけど。連れてきたよ」

三太と一緒に部屋に入る。

パパの部屋は入り口に近いところは応接室のようになつていて、パパはその椅子に座つていた。

頬杖をついて、じつとじつとを見つめている。

「パパ、彼が私の彼氏、三太君」

「森園三太です」

私が紹介すると、三太はペ「ひとつとお辞儀をした。^{じぎ}」
すると、今までひたすらじつとじつを見つめていたパパが口を開いた。

「芽衣子はどうだね？君は芽衣子と付き合つているんだろ？
芽衣子は君に迷惑をかけていいかね？」

「いえ、芽衣子さんは、とても面白くて、いつも僕を癒してくれます。^{ほぐ}

迷惑なんてとんでもない」

三太は答えた。

よくもまあこんなに嘘ばつか、スラスラいえるなあ・・・。ていうか普通にういうのつて、私のこと「面白」とかつて言わなくない？普通「優しい」とか言つんじゃない？

パパがまた、口を開いた。

「君は・・・芽衣子が原田グループの社長令嬢れいじょうと知つて付き合い始めたのかね?」

パパのこの質問には、私も黙つていられなかつた。

「ちょ、パパ! 何? 三太がお金おにぎりで私と付き合つたとでも言つの! ?」

「そういう可能性は高い。
だいたいお前はお転婆てんぱだし我儘わがままだし絶世ぜつせいの美女と言つ訳でもないし、頭もそんなに良くないし・・・」

「・・・ちよつと何が言いたいのパパ?」

「お前に言い寄る男の半分は金田かないだでだ、と言つ事だ」

「何ソレ! ? それって父親の言つこと? いくら何でも失礼だよ! 私に謝つてよ!」

憤慨ふんがいする私を無視して、パパは再び三太の方を向く。

「どうなんだね、三太くん」

三太は私の方をチラリと見て、静かに答えた。

「知りませんでした。芽衣子さんとは、偶然ぐうぜんの出会いだつたんです。その後、彼女から熱烈ねつれつなアプローチをつけ、いつの日か惹ひかれていたので・・・。

原田グループの令嬢と知つたのは、つい昨日のことです」

「・・・その言葉に嘘偽りがないか、確かめさせてもらつてもかまわんかね？」

「ええ、もちろん」

三太が言い終わると同時に、パパがパチンと指をなします。

途端とたん、私の体が宙に浮く。

いや、正確に言えば、何者かに持ち上げられた。私を持ち上げたのはパパのＳＰの一人・・・確か名前は橋本さんだ。

橋本さんは私を抱えて三太の横を通り、廊下に出た。

「うわわっ、ちょっと何すんのー！」

「すみません、お嬢様。旦那様の命令ですの。」

「どーゆーことよ、パパ！」

「三太くん、君の芽衣子への愛を試すよ。

私のＳＰたちにさらわれた芽衣子を一時間以内に奪還だつかんし、またこの部屋へ戻つて来ること。

参加するＳＰは3人。ＳＰたちの逃げる範囲はこの屋敷の一階だけ。どうだい？」

「おもしろいですね。

もし金田一で芽衣子さんに愛がなければ途中で投げ出すはず・・・

。

「これで僕の愛が本物が見極めよつて」「アですか」

「まあそういう事だ。それにプラスして、夫とのつのは妻を守る役割があるだろ？」

SPたちにやられるよつな男に、芽衣子を預けるわけにはいかないんですね。」

私を無視して、パパと三太はどんどん話を進めていく。

SPたちにやられるよつな・・・って何考へんのパ！？
うちのSPは選りすぐりの強者たちを集めてるんじやなかつたの！
？そんなの絶対無理じゃん！

「では始めよつか。橋本くん、私の令図と同時に三太くんから逃げるんだよ」

「はっ、分かりました。田那様」

話が終わるまで橋本さんと私を部屋の近くにおいておいたのは、パパなりの配慮だろ？

これで橋本さんは隠れられない。つまり純粹なおじつことなる。

「じゃあこへる

パチン

その瞬間、橋本さんは走り出した。三太がどんどん遠ざかっていく。
・ってあれ？

三太、いなくない？

「芽衣子っ、」ひちだ

声のした方・・・横を見ると三太がいた。

「えええええっ！？」ひちだ ・・・速っ――

「これでも毎日ジヨギングは欠かしてねーからな」

橋本さんはチッと舌打ちして、一番近い部屋に入った。

これはお手伝いさんたちの部屋だ。誰もいない。みんな一階へ避難ひなんしているらしい。

「お嬢様、ちょっと我慢がまんしてくだいね――」

「やあやつ――」

橋本さんはいきなり私を右肩に抱き上げた。これはお腹が圧迫され

てけつじゆ苦しき。

続いて三太も部屋に入つてくる。

橋本さんは三太を見て、お手伝いさんのベッドの足をつかみ持ち上げて・・・・・・投げた。

「うそオオオ！？」

投げられたベッドは一直線に二太の方へ。

しかし三太はそれをサラリとかわす。そのスキをぬって橋本さんは私を担いだまま部屋の外へ出た。

また長い廊下をひたすら走った。三太も後に続いた。

いくら私の家が広くて、廊下が長かつたとしても廊下といふものには終わりがある。

橋本さんは「失礼」と言って部屋に入る。

私の部屋はいわゆる少女趣味な部屋だ。見渡す限りのピンク。天蓋つきのベッド。ハート型のドレッサー。

これらは皆、私が3才くらいの時からお小遣いを貯めて貯ってきたものだ。

うちば金持ちのくせに小遣いとかだけ妙に少ないからすごく苦労した。

まさか、私のこの部屋でもさつきみたいに……？

嫌な予感がした。

そしてその予感は的中、橋本さんは三太が来るや否や私のベッドの足を掴んだ。

何だコイツはベッドを投げるしか能がないのか？

反射的にやつてしまつた。

「ぐあつ……」

「私のベッドに触るな　　つ……」

私は相変わらず、橋本さんに**かつ**がれたままだったが、やつきとは違
うところが一つ。

私の**ひじ**が、橋本さんの後頭部にクリティカルヒットしていた。

橋本さんは、そのままベッドにうつ伏せに倒れた。

原田芽衣子 16才！初めて人を昏倒させました！！

私は倒れた橋本さんの下から何とか脱出し、三太の方に駆け寄った。

「お前・・・スゲーな」

「うわせこ……への、ひびき届くよ……」

長い廊下の反対側まで来てしまつたので、私たちはまたパパの部屋まで廊下を走らなければならぬ。

そして更に、あと2人のS.P.が私たちの妨害ぼうがいをしに来るはずだ。

廊下の途中に飾つてある大きな花瓶を、三太は走つてゐるのをわざわざ止まって取り、抱えて走つてゐる。

S.P.に投げるつもりだろうか。・・・死ぬよ？

そして、2人目のSPが現れた。横の部屋からいきなり現れた。
1人ずつしか現れないのもパパの配慮だろうか。現れたのは・・・
確か・・・そう、池本さんだ。

池本さんは現れるなり、三太に飛び蹴りを咬まそうとしてきた。
そして三太はそれを避け・・・花瓶を池本さんの頭に被せた。
中でゴン、と鈍い音がした。

「…………あ、それそりやつて使つのか。投げるのかと想つた

「投げたら死ぬだろ」

そして2人目のSP、池本さんもガクッと膝を付き、倒れた。
花瓶は、池本さんの頭と一緒に地面に叩きつけられても割れなかつた。凄いなあと思った。

SPはあと1人。パパの部屋はもうすぐ。

これは・・・イケる！

そして3人目もスグに現れた。また横の部屋から出てきた。

この人は確か・・・松本さんだ。 今度は三太は私を抱えて・・・
・投げた。 ・・・投げた?

地面がどんどん遠くなつていぐ。人つてこんなに高く上がるモンな
の!?

いや、そんなに高くないか。・・・あれ？松本さんが近い。

「こうた ！」

「」苦勞様、芽衣子」

「」苦勞様つてアンタ、フツー投げる！？なんか頭打つたし！バカになつたらどーしてくれんの！？・・・って、ん？」

立ち上がりうとしたが、上手く立ち上がれない。と言つたが、地面がおかしい。コレは・・・

「松本さん・・・？」

「もつかい言ひや。芽衣子、お疲れさん」

パパの部屋は田の前にあつた。三太の顔は輝いていた。

「まさか、こんなに早く終わるとは思わなかつたよ。30分で済んだな」

「俺、腕つ節には結構自信があるんで」

腕つ節、関係ないじゃん。3人の内、2人は私が倒したようなもんだし。

「それで、お父さん、芽衣子さんとのお付き合いは・・・」

三太がそいつ言ひと、パパは少し唸つて言つた。

「わしも男だ。約束は守る。芽衣子との付き合いは、認める」

「えつホント? やつた!!」

私は思わず声を上げた。これでの男と結婚しなくて済む!

「時に芽衣子」

パパが静かに口を開く。

「何?」

「お前、婚約が決まった時は、好きな人、いなかつただろう」

「・・・えつ」

ドキッとした。何でそれを・・・

「人間、恋をしているかどうかなんて、一目見ればすぐ分かる。あの時のお前は、恋をしている田じやなかつた」

「…………」

いや、普通わかんなないって、一目見ただけじや

「だが、今のお前は、ちゃんと恋をしてこようだな……自分に正直に生きるよ。芽衣子」

「…………え？ うん……」

そう言つとパパは立ち上がり、私たちに背を向けた。

「パパは、何か心が痛いから寝るよ。ホラ、早く部屋から出て行きなさい」

「え……うん」

どこから出でたのか、お手伝いせんに背中を押され、私たちは部屋の外に出た。

出てから、私たちはお互たがいに顔を見合わせた。

「外……出よっか

私たちは廃ビルの屋上へと向かった。もうすっかり夜で、街はネオンで彩られている。

昨日三太が咲かせた花は、跡形あとがたもなく消え去っていた。

魔法つて凄いなあ・・・と思った。

フェンスに寄りかかり、一人並んで座る。10分ほど、沈黙ちんもくが続いた。

沈黙を破ったのは、私の方だった。

「三太・・・ありがとね」

「ああ・・・まあ、願い事だつたからな」

「これで、私の願い事叶えたから、サンタになれんの?」

「ああ。合格と認められたらな」

「よかつたね」

「ああ」

再び流れる沈黙。今度は三太の方が破つた。

「あのや・・・芽衣子、俺、実は全部ウソだつたんだよね」

「ふーん・・・つて、ええええーーー?」

私は思わず立ち上がる。フーンスがガシャンと音を立てた。

「いめん、芽衣子の」と、ずっと騙してたんだ

「うううううーーー?でも、魔法使つてくれたじやんーーー?」

「あれは手品。タネさえ分かれば誰にも出来る、簡単なやつ

三太は深く溜息をついた。

私は、再び三太の隣に座る。

「・・・何で、そんな嘘ついたの?」

「・・・芽衣子は、多分覚えてないだろ?けど、オレら、前に一回会つてんだよね」

「えつウソ」

「マジ。・・・1年くらこ前かな。

オレのばーちゃんが道端みちばたで転んで、荷物ぶちまけた時に、芽衣子、
拾つてしばらく荷物運んでくれただろ」

「…………あ

思い出した。

確か商店街でおばあさんが転んで、困つて、重そうな荷物持つてたから、少し運んだんだ。
で、確か途中でお孫さんが来て、荷物をバトンタッチして私は帰つたんだ。

「あのばーさんの孫が俺だよ」

「えっ、ウソオオオ！！？だってあの孫、身長すつじに低かつたよ
！！！？」

確かに私よりも低かつた筈だ。

「1年ですっげー背せ伸びたんだよ」

「へえ～」

三太は続けた。

「お前……ばーちゃんに色々な事話してただろ。
ばーちゃん、それ俺に全部話すもんだから、もう覚えちまつてよ。
だからお前の名前知つてたんだよ」

「ああそれで……」

「因みに言つとくがな、この屋上のことは偶然だぜ？」

オレも月イチくらいでここに来てたんだ。1人になれる絶好の場所だし」「

「えーっウソ。私だけの場所だと思ってたのにーっ！」

「・・・え、てコトは何、あのサンタ証明書つていつも持ち歩いでるワケ？」

「ち、ちげーよ。アレはたまたま。昨日は午前中に子供会の手伝いでサンタ役やつてて・・・。

今時のガキはませてるから証拠作んねーとつて、作つたんだよ。それでポケットにいれっぱなしだつたんだ。

この場所だつて、俺だけの場所だつて、俺だつて思つてたよ。昨日だつて、たまたま来たんだ。何となく、足が向いて・・・」

三太は空を見上げる。私も一緒に空を見上げた。

「・・・ばあちゃん、半年くらい前に死んだんだ。元々の病気が悪化してな。

最期まで、お前のこと、話してたんだよ

「・・・へえ」

私にとつては、特に思い出深い出来事でも何でもなかつたのに。そこまで嬉しかつたのかな。・・・何か嬉しい。

「でさ、俺、結構ばーちゃんつ子だつたから、俺もお前に・・・芽衣子に何かしてやりたくなつた。

お前のおかげでばーちゃん、最後に幸せな思い出が出来たから

「・・・そつか」

「でも、それだけじゃねエんだよ」

三太が立ち上がる。

「おへじよ昨日屋上上がりつてきて、あんなバカな事、大真面目に言えたのは、確かにばーちゃんの事もある。

けど・・・彼氏が欲しいって叫んでるお前の・・・その願いなら、俺にも叶えてやれるって思つたんだ」

「・・・は、それ、どーいう意味?」

「俺は、恋してたんだよ」

そつ言つと三太は出口の方へ歩き出した。
言い逃げするつもりだ。

「三太つ・・・！」

私は叫んでいた。

「三太は立派なサンタクロースだよ!
だつてホラ、私の願い事、叶えてくれたじゃん!…だから、もう

一つだけお願ひさせてよ！
私も、恋しちやつたんだ！」

「・・・え・・・」

「私の恋人になつて下さい！！」

言つたぞ！多分私今、顔真つ赤だ。何か暑いもん。いきなり、ふわつとした感触が体を包んだ。

「・・・そーゆーのは男の方から言わせりつーの」

「三太・・・」

街の方から、クリスマスソングが流れてくる。そう言えども、今日はクリスマス・イブだ。

サンタさん、私、今年からプレゼントいりません。

だつて今年から、私だけのサンタクロースが来てくれたから。

私は君に願いをかけるよ。

ねえ三太、私だけのサンタクロース。

(後書き)

作・春日遙

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1462e/>

君に願いを

2010年10月21日21時13分発行